

Ⅲ お わ り に

養護学校が義務制になって10年の節目になる現在では、教育の目標や内容に関しては一応共通に理解し合えるまでになっている。しかし教育内容をどのように編成し指導すればよいかというカリキュラムと指導法については、現場のかかえている問題がそれぞれに複雑であるため困難を伴っているのが現状である。

本校における今までの研究のあゆみをふり返ってみると、義務制を迎えた50年代は子どもの重度・重複化・多様化に対応する個別学習と集団学習についての実践的な研究を進めながら指導の手だてを模索していた時期であったと思われる。とりわけ“集団学習”については教師を含めた集団そのものが大きな教育的役割を果たすということを大切にしながら学校生活づくりに取り組んできたと言えよう。即ち小・中・高別の集団、中・高合同の集団、全校の集団それぞれの中で、子どもたちみんなが楽しく参加できる集団活動にはどのようなものがあるかについて継続研究を行い現在に至っている。

ところで今年度の本校の研究は“発達と障害に応じた指導”というメインテーマをかかげ、一つには小・中・高別に分かれての実践研究と、もう一つは全校の教師が6つの課題別研究グループに分かれて研究を進めてきた。部別の研究では毎日の授業の中から各部の現状と実態にあわせて次のような実践を行っている。小学部は部朝の会での集団言語指導についてであり、中学部は週2時間実施している部集会「ハッピータイム」の活動内容と指導である。高等部では青年期における情操の教育の面に新たなスポットをあて「芸術」の授業を実践し発表することにしたのである。なお課題別の研究内容については本紀要にグループ別の研究報告を行っているので、それによって本校でいま何を現代的な研究課題にしているかについて、おおかた理解いただけるところである。

私たちが今回取り組んできた研究方法は上にも述べたように組織のちがった二つの研究を両立させていかなければならないという点で、研究推進上教師の負担が大きくなりどっち付かずになるのではないかという懸念もあった。しかしいざ取り組んでみると従来の一つの研究テーマで全校が動くよりも各教師が自分のやりたい課題のグループに入って研究できるという点ではむしろメリットが大きかったようである。教師一人ひとりが研究の主人公となって、それぞれの研究スタッフが時間を見つけて自主的に研究会をもち研究活動が日常的に活発に行われてきたことは特筆すべきことである。PTAは昨年度は“通学について”今年度は“食生活について考える”というテーマでアンケート調査等を行い研究を進めてきた。養護学校の教育においては、子どもと教師そして親が三位一体となって共に育ち合い学び合う姿がなければ教育の効果をあげることはできないであろう。その意味でPTAが教師と肩を並べて研究活動を行っているのも本校の特色である。研究の内容や方法について忌憚のないご批評を希求する次第である。

(伊 藤 泰 彦)